

登山・登攀の記録

日中友好 天山山脈雪蓮峰登山隊 1988

日時:1988年7月13日～8月29日

メンバ:日本山岳会東海支部雪蓮峰登山隊6名、中国側隊員8名。高岸且が隊員として参加

概要:世界地図を広げてみてユーラシア大陸のほぼ中央部。そこには天山山脈がある。そのほぼ中央部に位置するのが雪蓮峰(6627.3m)である。雪蓮とは、天山山脈に自生する植物でその花は白く大きさは人の顔ほどであり香りは甘い媚薬の様であると言う。

氷河の雪解け水の濁流がうなるムザルト河を馬で渡り、砂あらしのベースキャンプからの荷揚げがはじまり、アップダウンの激しいモレーン帯のキャラバンが続いた。4000mのC(キャンプ:以下同じ)3からは、恐る恐るクレバス帯を越え氷や岩のふる急雪壁に挑んだ。5500mを越えたとき、彼女はその真の姿を現した。頭はもうろうとし、夢うつつとなっていた。自分は何なのか、ここは何処なのか。抜ける空の蒼さ、はるか遠く見える頂、切れおちた岩壁の下の氷河。時は既に止っている。未だ誰一人として踏んだとのないその絶頂。もう二度と彼女の姿を望むことはないだろう。しかし、甘い媚薬を含んだような色焦ることのない夢を、あの瞬間を忘れることはないだろう。

天山無遠碧

層々

日本山岳会東海支部による雪蓮峰登山隊1988は、86年に続き2度目雪辱戦であったが6300mまでで敗退した。その後、89年、90年の都合4度の遠征を重ね、宿願の雪蓮峰の頂に立つことができた。

記録

7月13日に日本を出発した本隊は、北京、ウルムチを経て7月15日に登山基地アクスの街に着いた。翌日アクスの街をジープで出発し、途中、少数民族の生活する破城子の村落にて、しばし旧交を暖めた。先発隊が苦労もなく通ったムザルト河右岸の自動車道は、数日前の大雨洪水で崩壊し、通過に大変苦労を強いられたが運転手、中国協力員、通訳の必死の努力で夜遅く終点サズルクに到着した。大雨洪水の復旧動員で馬方、馬のサズルクへの到着が3日遅れた為、7月20日にムザルト河を渡河し、濁流のムザルト河支谷アクチ河に向かった。



本隊は、そのままカラクメ氷河舌端にベースキャンプ(BC:以下同じ)を設営する為、アクチ河左岸を馬でキャラバンするが、その直後、馬に不慣れた漢族ポーターの引く馬が崖から墜落死する事故が起きた為、少数民族の馬方は、動揺し、これ以上の馬でのキャラバンの協力は、中止された。しかたなくアクチ河口左岸の台地2500m地点にBCを設営した。7月21先発隊と合流し、隊員、5名の低所ポーター、それにアクチ谷に遊牧する少数民族の協力で荷揚げし、カラクメ氷河舌端3100m地点にC1を設営した。

ヒマラヤ山脈に比べ高緯度に位置する天山山脈(北緯42度付近)では、雪線が低く、3000m程の高さからアップダウンの激しい氷河のモレーン上の登高が始まり、C2(3500m)を7月27日に設営した。

さらにそこからモレーンを登高し、雪蓮峰より東に伸びる主尾根が南と東に分れるジャンクション・ピーク(JP:以下同じ)への下部氷河と支尾根をはさんだモレーン上の氷河湖畔にC3(4050m)を7月29日に建設した。

そこからJPに続く南東尾根に登攀ルートを決定

登山・登攀の記録

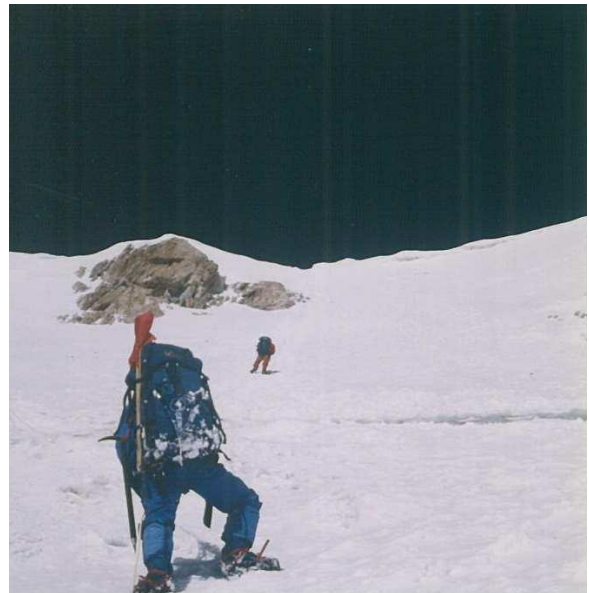
し、ヒドンクレバス帯、アイス・フォール帯を越え、急な氷雪壁を登って仮 C4(4900m)を8月3日に、さらに急峻な岩と氷雪のガリーを登り、C4(5250m)を8月6日に、さらに雪田をトラバースし急な雪壁を登り頂上アタックのC5(5950m)をJPの南東肩に8月12日に建設した。



しかし、この頃から天候が悪化し一日おきに雪となりラッセルの跡もすぐ消され、寒さも一段と厳しくなった。隊員の疲労も増し、高度の影響と相重なって、2名の経験の浅い隊員(高岸、横沢)が体調を崩し、やむなくBCに下る事態になった。

8月16日より体制を立てなおし、ジャンクション・ピーク下部岩壁のトラバースと雪蓮峰頂上へ続く主稜直下の氷雪壁にフィックスロープを16ピッチ固定し、6300m地点までルート工作をして登頂体制を固めた。しかし、この日の夕方より雪が降り始め、翌19日は終日降り続き、上部キャンプでは1mを越える大雪となった。この雪も夜半には止み、星空になった為、明日のアタックを決定した。翌8月20日午前1時30分のトランシーバー交信では、風が強く、ガスが出ているがアタックに出発するとの元気な声が聞こえた。しかし昨日までの1mを越える雪に固定ロープは埋まり、ラッセルが深くなると頭程の高さになる為、アタック隊はピッチが上がらず苦闘が続いた。午前9時頃から天候が崩れ始め雪も降り出した。隊員の手足も凍傷にかかる程寒さも厳しくなり、烈風で顔も上げられない事態になった為、11時40分に登頂を断念し、主稜線直

下(6200m)で引き返すことを決断した。翌8月21日再度アタックを期して頑張っていた隊員の気力、体力は、天山山脈の自然の厳しさに打ち負け、遂に、8月21日登頂を断念した。



◎日中友好天山山脈雪蓮峰登山隊 1988
登山メンバー

隊長・渉外 徳島和男(43)

南山高等・中学校女子部教諭

登攀隊長・医療 篠崎純一(24)

名古屋大学学生(山岳部)

会計・記録 加藤勇治(27)会社員

食糧・輸送 横沢敏和(21)

日本大学学生(探検部)

装備・輸送 亀田正人(22)

立命館大学学生(山岳部)

食糧・輸送 高岸 且(22)

京都府立大学学生(山岳部)

協力メンバー

雷訣菜(50)リエゾン(連絡官)

王星(31)通訳、王洪生(22)コック

魅 牟(23)ポーター頭、林 彪(24)ポーター

趙伝祥(24)ポーター、猛宏成(24)ポーター

荃宏江(22)ポーター

登山・登攀の記録

C5への稜線(約 5800m)

C5直前で雪蓮峰の山頂が見えた

